

## 詩時評

### 第31回

## 考える詩人とは

松本衆司

先日、大阪の天王寺高校の国語の先生から小野十三郎が天高の前身の天王寺中学の出身ということ、小野さんの著作を読みたい、と求められた。たまたま手元に昭和二十五年発行の『新しい詩の作り方』（平和出版社刊）のコピーを持っていたので差し上げた。

小野さんの『現代詩手帖』（創元社刊）より「現代詩とは何か」という文章の一節を引く。「エリオットによれば、考える詩人とは、思想の情緒的等価物（emotional equivalent of thought）を現し得る詩人のことである。

思想の情緒的等価物というのはちよつとむずかしい表現だが、これは思想を完全に情緒化したかたちで現わすということだろう。一つは思想を、その観念形体のまま詩の中にながすのではなく、いわばそれを匂いのような

ものに転化させて表現できる詩人がつまり「考える詩人」だ。かつて、この文章に私は自らの詩の方向性を確信したことを思い出す。

山本幸子詩集『父を抱く』（編集工房ノア）を読む。表題作「父を抱く」を引く。

春の彼岸のころ／永代念仏の願いをかなえるために／鳥辺野墓地から宗祖親鸞を囲む  
総墓へと／父の骨を移す／わたしの喜びを  
人が喜んでくれ／わたしの悲しみを  
ひとが悲しんでくれる／ことばにすれば当たり前の  
かんたんなことが／とんでもない不遜な夢だった／三歳で生母に死別し  
／虐待下で育った父よ／わたしの存在の内奥に／  
餓鬼のようなものがいて／愛してほしいと  
喚きながら／どんどんと  
わたしの内壁を叩く／妻や子に  
暴力を振るうしかなかった父の／寒さの残る骨を抱いて  
／花冷えの京都市街に向かって／墓原の道を下る／  
蓮は泥田に咲く／父よ／わたしはあなたの／  
苦の生存を受け止めます

詩集を読み、詩を書き写し、しばし心が立ち尽くす。人として至りついた心がこの詩を書かせたのだろう、と。四苦八苦とは命ある人間が背負うとする仏教の言葉だが、それはどこに人の世は理不尽だ。しかもそれとて人そ

れぞれの苦しみだ。詩はそこにある。

磯崎寛也詩集『キメラ／鮫鯨』を読む。「フクシマ／Don't Follow the wind」を引く。

皆既日食の夜／友人に誘われて／フクシマに出かけた／誰もいない街を歩くと／すぐに行き止まり／バリケードの先には行けない／そこに暗い池と／小さな祠がある／朽ちていく／不在の家／二階の窓から／黒い頬被りが／手招きしている／倒れたままの／墓石が急に／語りかけてくる／その声は次第に大きくなる／与えられた／ヘッドホンから流れる／切ないギター／ループする／幽霊の会話／そこにあるのは／氣遣いと絶望／氣遣いと絶望／チェリームインの下の／真っ赤なモミジ／その一枚一枚が／フクシマである／散つてしまえば／土に戻る／私たちがこの世にいないことを／証明するために／このマルチバースから／思弁の実在を／獲得するために／  
Don't Follow the wind

微視的な世界から巨視的な世界まで、私たちはしばしばその荒ぶる人々と自然の前に立ち尽くす。詩人はその両極を見据え、その混沌の中に脈々と流れる尊い命の営みの痕跡と命のあるべき姿を見出そうとする。「フクシマ

マ」には双葉町とルビがあった。

うめのしとみ詩集『どきんどきん』（詩遊社）を読む。「赤い実の木」を引く。

静まれ雀 雀／まだ朝の6時じゃないか／  
／僕は夜勤で夜中の2時に帰ってきたんだぞ／君達はもう赤い実の木の中で眠っていたじゃないか／夢なんか見て暢気に／そんなに鳴くな 出勤の準備かな／君達は正社員なんだね／朝出勤して夕方早くに帰宅しているんだものね／あ、うらやましい／僕は勤務してもう十年になるけれど／手取り18万の準社員なんだ／もうすぐ正社員になれるって課長は言う／すると夜勤もしなうてよくなる 月取も増えそうだ／結婚しようかな 結婚してくれる女性がいるかな／雀 雀／君達はおしゃべりな大家族なんだね／そんな家族もいいな／自殺者が3万人のこの日本／ほくは結婚して家族を守れるか／僕は僕の子に生きる希望を与えられるか／もう少し寝るよ／夕方にはきつと 赤い実のこの木に帰ってきてくれよ／僕の窓辺にあるたった一本の木に／独り者の僕の為に／それにしても／雀

楽しい詩集と言えば、語弊があろうか。それぞれの詩篇にそれぞれの個性があり、切実

な味わいがあり……。この詩も夜勤の準社員  
の若者が主人公で騒がしい雀の鳴き声に眠り  
を妨げられる朝の一シーンだが、そこに見事に  
時代や人の心が映し出されている。いずれ  
の作品にも生きる思いがあふれている。

月岡一治詩集『虹』（ふらんす堂）を読む。  
「どうしたの？」を引く。

可哀そうだけれど言わなくちゃいけない／あ  
んな最近 言うことがおかしいよ／話しか  
けても／返事が的外れだし／一度専門の医  
師に相談してみようかねえ／妻は私の目  
をじっと見て／ずっと言わなかったけれど  
／私 あなたにおんなじことをかんじてい  
たの／話しかけても／聞こえていないこと  
もふえていて／ある日／私は不思議にお  
もってきた／おまえ／どうして目になみ  
だをためているの？／あなたがわたしの  
なまえまでわすれているから／そんな日  
が／ずっとずっとときまぜんように／わたしの  
目になみだが／あふれることもありませ  
んように

生きていく限り、私たちはいろいろな時間  
を過ごす。願わくはそれぞれの時間がいい時  
間であってほしいが、それを妨げる諸事があ  
る。この詩集は、夫婦の、そして家族の寄り

添う時間を愛おしく語る。そのことで、鎖の  
輪の一つである人間としての生と絆の尊さを  
見つめ直す詩集である。

川上明日夫詩集『紙魚の家』（山吹文庫）  
を読む。「つるんと雨・駅で」を引く。

雨が降ってます／鳴が鳴いてます／雨音は  
ひとりの呼聲でしたから と／つるん／こ  
の駅で一緒に 雨 聴いてましたか／え  
え だれも知らない／さきの世の／耳の草  
叢に 隠れ／さつき 履き 忘れてきた  
そんな／煙の 足音ばかり／時刻表のない  
刻の思いの せらぎを／ひっそり わたっ  
て／黄身 白身 卵の殻のような そんな  
淋しい／音色の 雨でしたね つるん／喉  
ごしに ツツツと奔る きぬぎぬの 長雨  
／ながめて／心 ころころ一人 ころがっ  
てゆきましたよ／ああ 美味しいな／の  
喉元わたした 匂配に 塩 ふって／冷で  
一杯／きょう 河原の小石 一つ 二つ  
積んで／暮終い／お焼香です と／わたし  
一人の 紅葉の深度に 濡れてゆく／つる  
ん／絵葉書の中の／淋しい宛名も そつと  
もの思いに耽る／／越美北線 美山町 計  
石駅／白骨草 もう 咲いてましたか／  
／しみじみ 凍みて／また／この世に ごと  
返杯の 声がする／／つるん／魂の水分の

匂いなどしてきましたよ

不思議が立ち込める詩の世界に川上明日夫は連れて行くとする。ただ、この川上の霊的な匂いの立ち込める情景は山川草木の生き死にの風景ではなかったか。脳化し都市化した現代人に詩人が伝えようとするのは、六根清浄の向こうにある尊いいのちの手触りだ。

北畑光男詩集「背の川」(思潮社)を読む。  
タイトル詩「背の川」を引く。

目が開かない／子猫たちの乳を欲しがる声  
がおれの手から離れ／石にぶつかり下って  
いった／あれから何十年も経ち／飢饉の  
ことを調べている時であった／天明や天保  
の飢饉の時には／生まれたばかりの赤子を  
筵に包んで北上川に流していた／いくつも  
の橋桁などに引っかかっていた／石臼で赤  
子を押しつぶしたという古文書にもであっ  
た／生まれたばかりの子猫と人のちがいで  
こそあれ／おれも川に子を流したのだ／  
空襲の猛火に襲われ／川に飛び込んだ人が  
流れていったという／おれの生まれる一年  
前のこと／東京の隅田川 熊谷の星川 前  
橋の広瀬川／原爆を落とされた広島島の元安  
川や太田川などでもおこったことだ／虐  
めに遭って川のなかに足を入れた少年／水

の冷たさよりも／人の冷酷を呑み流れてい  
ったのだろう／ノートのなかに／ありがと  
うだけを書いて家族から消えていったのだ  
／病で臥せたおれの背には川が流れてい  
る／澱みには／目の開かない泣き声もひっ  
かかっている

先年、住まいの近くに林立していたメタセ  
コイヤの大木の枯れ葉が煩わしいとすべて切  
り倒された。先日、同様の苦情で近所の桜の  
木が伐採された。いらぬもの、邪魔なもの  
にも命はある。誰にも命あるものを損ねるこ  
となどできない、人間の最大の愚行は…と書  
き進めて、詩人の言葉に我が「背」を想う。

中原道夫詩集「空」(土曜美術社出版販売)  
を読む。「空」「夕焼け」「ロボット」の三章  
よりなる。第二章の「夕餉のひととき——八  
月十五日」を引く。

——武士道というは死ぬことと見つけたり  
／『葉隠』のこの言葉は少年の美学であっ  
た／ゆえに、飛行兵になって／国のために  
尽くすことが少年の夢だった／一九四五  
年七月／お隣に住んでいた小松少尉は／帰  
路のガソリンのない特攻機で出撃したが／  
敵陣に着く前に撃墜されて海の藻屑と消え  
た／それが犬死にだとは分かってはいいたが

／だれもが軍人の本懐なのだと言え  
／小松夫人は歯を食いしばり涙をこらえて  
いた／それから、わずかひと月／「玉音  
放送」は少年の心を／すべて虚無の衣で覆  
った／——負けたんだ 負けたんだ／  
——戦争は終わったのだ／一瞬、小松少尉  
の悔しさに満ちた顔が／浮かんで消えた  
／——武士道というは死ぬことと見つけた  
り／あれはいつた何であったのか／そ  
の夜、電燈を蔽っていた／黒い布地を外す  
と六十燭の電燈／——なんて明るいんで  
しょう／——そして、静かだねえ／それ  
は久しぶりに／B29の爆音の間こえない夜  
／母の声は／「玉音放送」以上に／戦争  
の終結を告げていた

一九三一(昭和六)年生まれの中原道夫が  
人生の歩みを振り返り、淡々と心の糸を紡い  
だ詩集だ。戦争の悲惨が他人事として風化し、  
軍国化していく現代日本ゆえに、一層、若者  
は詩人の言葉に耳を澄ませなければならぬ。

相沢正一郎詩集『テールルのあしを洗って  
いる葡萄酒色の海が……』(砂子屋書房)を  
読む。「ウィリアム・シェイクスピアのため  
の10の歌ー(わたしは窓辺で ひととき何も  
かも忘れて)」を引く。

わたしは窓辺で　ひととき何もかも忘れて、  
ゆつくり通りすぎていく雲を　ぼんやり  
眺めていた……／いつものように空が　白  
から灰に　朱色から黒に　と　包帯のよう  
に薄汚れていくと、／いつのまにか窓ガラ  
スが鏡に変わる。わたしはわたしの前に立  
つている　半分すぎとおったひとを見なが  
ら、／……わたしとは別の人生を歩んでき  
た　わたしがいる、なんて思った。／  
《あのとき、二艘の船があとわずかという  
ところで、／私たちの目の前に巨大な巖が  
迫り、／その上にはげしくのしあげられ、  
／頼みのマストはなかほどからまつぶた  
つ》／そのひと　きょう、口をあけて  
いないシジミをお腕のなかで見つたり、  
／紙パックの三角屋根がうまく剥けなくて  
ギザギザの口から神っぽい味の牛乳を飲ん  
だり、／ソファの下からスリッパのかた  
われを見つけたりしたんだらうか。／その  
ひと　きょう、ボールいっぱいの苺のへ  
たを取って　苺ジャムを作り、そんなささ  
やかな行為のために生きてきた……いまま  
で、／なんて思ったりしたんだらうか。／  
／やがて、皿のうえの皮を剥いたりリンゴが  
／白から黄　茶色から黒に変わる。／わた  
しはいつものようにベッドで眼を閉じて  
ふたたび眠りのなかへ。／……………  
／《この広い世界に対して、おれは一滴の

水だ、／大海原にもう一滴の仲間を捜し求  
めて／飛びこんだはいいが、人には知られ  
ず、／人のありかを知りたいと願ううちに、  
形を失うのだ》

\*《内は、「間違いの喜劇」より。

人生の歩みの中で培われた読書と思索の確  
かな「テンプル」ゆえの「葡萄酒色の海」な  
のだ。詩集のどこを読んでも、思索と想像を  
楽しむ文学の上質なひとときが醸し出され、  
まるで音楽のような詩語の時間が流れていく。

鎮西貴信詩集「おーい　古い」（土曜美術  
社出版販売）を読む。「古い青春」を引く。

いい歳刻いて／人生とは何かを考える／世  
界のことを知りたい／正義を貫きたい／愛  
しい人に出会いたい／青春時代の希望／  
いい歳刻いて／美女にどきどき／祭りにう  
きょう／格闘技にわくわく／勝負ごとに着  
きつけられる／青春時代の躍動／いい歳  
刻いて／この世の謎に興味津々／酒飲んで  
談笑・討論／日本の未来を語り合う／はる  
か宇宙に心が躍る／青春時代の気概／い  
い歳刻いて／語学の勉強に夢中／テレビと  
ラジオを交互に利用／新単語・新熟語が頭  
に入らず／せつせと単語帳の作成／青春時  
代の学習

駄洒落ながら洒落た題の詩集である。山村  
暮鳥の詩を懐かしむ。無論「古い」ではなく  
「雲」だった。いい歳刻いての「刻」  
に「こ」とルビがある。ああ、そうなのか、  
こうも書くのか、なるほどこれもよし。昭和  
二十年生まれの詩人、生老病死の辛苦を経た  
が、青春は詩人の今に地続きで、老いてなお  
「青春」の「希望」や「躍動」に満ちている。  
「古い青春」の書である。

石下典子個人詩誌『靨』十八号を読む。個  
人誌は私信のようで心に温かい。「夜のくち  
ぶえ譚」の三・四連を引く。夜の口笛の言い  
伝えに疑問を抱く友人の問いかけに導かれて、

あおい匂い——そうだ／ふきの皮をむく人  
のかたわらで／しきりにくちぶえの練習を  
していたのだ／すると／暗くなつて吹くと  
泥棒がくるよ／言い伝えを教えたのは祖母  
だ／すっかり吹き方を忘れた　かわいた  
皮から／かすられた音がもれる／口碑伝承の  
／神聖な行為なら呼ぶと信じて／親しい霊  
魂をまねきよせる夜

いろいろな迷信がある。たしかにそれらは  
闇に広がる死霊の世界を生きる暮らしの中に  
いれない畏怖の手段であったのかもしれない。